まちの話題

えさし

キノコの不思議な生態学ぶ

岩谷堂地区振興会「大人の教室」

実物を前に特徴などを聞く参加者

岩谷堂地区振興会（広野雅喜会長）が主催する「大人の教室」は10月20日、江刺生涯学習センターで開かれ、住民ら20人が参加しました。

この教室は、誰でも楽しみながら参加し、学ぶことを目的としています。今回は「キノコの不思議な世界」と題して、北上市立博物館の佐竹邦彦専任研究員が、キノコの種類や生態などを講義。その後、交流を兼ねて参加者によるきのこ汁作り、試食を行いました。企画・運営を担当する同会生涯学習部の近藤正光副部長は「今後も普段の生活に役立つ題材を取り上げていきたい」と話していました。

歴史と文化の継承を願って

新・衣川橋に児童が書いた橋名板

平泉町と本市を結ぶ国道４号の衣川橋架け替え工事が完了し10月19日、同橋の橋名板除幕式が現地で行われました。国土交通省岩手河川事務所の西條一彦副所長のほか、平泉小学校、衣里小学校などから関係者約50人が出席し、新橋の完成を祝いました。

橋名板には「平泉町と本市の歴史と文化を継承していく橋」という思いを込め、両市町の小学生が書いた字を採用。平泉町側には、千葉遥奈（はるな）さんと達谷窟佐紀（たっこくさき）さん（ともに平泉小６年）の「衣川橋」「衣川」の文字、衣川区側には衣里小６年の及川有咲（ありさ）さんが書いた「ころもがわばし」の文字が刻まれました。有咲さんは「自分の書いた文字が一生残るのでうれしい。友達からは『いいなあ』とうらやましがられました」と笑顔を見せていました。

新しい衣川橋は、同月21日から供用を開始しています。

伸び伸びとした字が刻まれた橋名板と及川有咲さん

みずさわ

アツアツの芋の子汁に舌鼓

日本一のジャンボ鉄鍋で調理

にぎわった芋の子汁の振る舞い

直径3.5㍍、重さ5㌧の日本一のジャンボ鉄鍋で作った芋の子汁を振る舞う「奥州水沢グルメまつり」は10月21日、水沢体育館前広場で行われました。

地元の調理師会員をはじめ、商工会や農協女性部員など約150人が下ごしらえ、調理を担当。材料には、サトイモ500㌔、鶏肉180㌔、長ネギ、ゴボウ、こんにゃく各100㌔などが使われました。南部鉄器のふるさと自慢のジャンボ鉄鍋で作った芋の子汁を味わおうと、会場では開始時間前から順番待ちの長蛇の列ができ、用意された約6000人分の芋の子汁は約１時間で完食となりました。

奥州牛を気軽に、手ごろに

ひめかゆがハンバーグ定食発売

焼石クアパークひめかゆで10月12日、同施設の食堂で提供する新メニュー「奥州牛ハンバーグ定食」の試食会が開かれました。

奥州牛は昨年、岩手ふるさと農協管内で生産される水沢・胆沢・衣川・金ケ崎牛を統一して誕生しました。肉質の均一化も進みつつあり、首都圏の市場関係者からも評価が高まっています。この奥州牛を地元市民にも気軽に味わってほしいと、同農協の協力を得ながら研究を重ねてきました。

奥州牛100％ハンバーグが手ごろな値段で

当面は１日20食（１食980円）の限定販売。牛肉のほかにも、海産物や果物を除き、地元の食材が使用されています。

いさわ

ころもがわ

都市と農村との交流を探る

グリーン・ツーリズムフォーラム

パネリスト６人が体験談を発表

都市部の住民が農村生活を体験するグリーン・ツーリズムのフォーラムは10月21日、サンホテル衣川荘で開かれ、市民ら約120人が参加しました。

おうしゅうグリーン・ツーリズム推進協議会（佐々木信雄会長）が企画。旧衣川村長の佐々木秀康さんが「蟻の飯（ありのまま）」と題して講演したほか、グリーン・ツーリズムで訪問した学校の教員や生徒の母親、受け入れ農家の人などがフリートークを展開しました。「思春期の難しい時期に温かく迎えてくれた」「子どもたちに会えるのが楽しみ」などの体験談を発表し、より良い関係づくりを探りました。

地域住民に開かれた施設へ

養護学校生徒らが住民と交流

10月27日、第７回前沢福祉の里まつりが県立前沢養護学校などを会場に行われました。このまつりは、白梅の園、県立たばしね学園、県立前沢養護学校の隣接する３施設を開放し、地域とのふれあいを目的として、毎年行われているものです。

当日はあいにくの雨でしたが、養護学校体育館で行われたふれあいステージでは、養護学校生徒がよさこい団体と一緒になった演舞や、工夫を凝らした発表で会場を盛り上げました。区内の児童や地域住民による演技発表などもステージに華を添え、来場した人たちは楽しそうな笑顔で声援を送っていました。

よさこい演舞で会場も最高潮に

まえさわ